
アンリアル

夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンリアル

【Nコード】

N7249Y

【作者名】

夜

【あらすじ】

「お前を殺す」——本物の殺し文句と死の接吻、彼女は夕立のよう
に現れた。

暗殺者の少女レインと高校生リオは出会い、奇妙な関係が始まり…

…

サイト『Dis Pater』でも掲載中です。

K i s s o f D e a t h

退屈だ。毎日、毎日、そう思ってる。気が付けば俺は今日も決まったスケジュールを消化している。その繰り返しから抜け出そうとして足掻いても、結局、何も変わらない。虚しいだけだ。

異理央たつみりお、それが俺の名前。正直、俺はこの名前が好きじゃない。女の名前だからとかそんなじゃない。大きくなるにつれて漠然と胸の奥にあったものが溢れ出てきた。けれど、それを爆発させるほど子供でもない。そうしてはいけないとわかってる。あの人を深く傷付けてしまうから。

「ねえ、リオ。何を考えてるの？」

俺の腕を引いて、上目使いに彼女は問う。

名前はもう忘れた。大して意味もないから。どうせ、今日限りの付き合いで呼ぶこともない。

マスカラを塗りたくった睫、大きく見せようとした目は綺麗じゃなかった。一体、この汚い化粧に、彼女は何時間かけてるんだろう。みんなと同じ化粧をすることにどれだけの意味があるんだろう。

「あんたが退屈な女だってことかな？」

取り繕う気にもなれず、俺は適当なことを言った。自分のことばかり話して、俺に取り入ろうとしてるのがよくわかる。胸焼けのするような香水の匂い、やっぱり今日は無理。

「サイテー！」

勝手に掴んでいた腕を放して、鞆を彼女は振り回す。

「サイテーなのはあんたもだろ？」

言えば、彼女はぴたりと止まる。どうせ、顔とか金とか、遊びただけ。わかりきってる。行き先だって聞くまでもなく決まりきっていた。甘くとりけるデートなんて必要としていない。刺激が欲しいだけ。

「あんた、何様!？」

浴びせられる罵声にも俺の冷めた心は痛まない。“俺様”だって言われることにも慣れた。実際、その通りだ。俺は不自由を知らないし、何でも思い通りになってきた。

「わかりきってることを今更責め立てるのはあんたが醜いからじゃねえの？」

俺をサイテーな男だつてわかつてて彼女は近付いて来た。だから、俺を責める資格なんて彼女にはない。

「あんたなんか……! 地獄へ落ちろ！」

陳腐な台詞を吐き捨て、彼女は走り去る。俺はただその背が遠ざかるのを見ていた。サイテーなのはわかつてる。まだ高二なのに、俺はこれから先どうなるんだろう。先が見えなくて、ただただ足掻いてる。巽の名前も理の字も央の字も何もかもが俺には重い。重すぎる。

「冴えない言葉だったな」

まるで俺の心を読んだかのようにその声は響いた。

人通りの少ない道、誰も俺たちのことなんか気にしてないと思つてたのに、彼女は突然俺の前に現れた。

一言で言えば美少女、多分同い年ぐらい。艶やかで真っ直ぐな黒髪、大きな瞳、ジーンズにミリタリーなジャケットなんてボーイッシュな格好ながら、可憐という言葉が似合う華奢な女だった。

だから、俺は声が聞き間違いだつたと思おうとした。それは綺麗な声だつたけれど、あまりに淡々としていたから。

「私ならもっと刺激的な言葉を吐いてやるのに」

今度ははつきりとわかる。その唇が動いたのが見えた。確かに。彼女がその言葉を吐いている。彼女は一体何を言っている？

「退屈なんだろ？ リオ・タツミ」

ゆっくりと彼女が近付いてくる。俺は動けなくなる。

彼女は何で俺の名前を知っているのか、そんなことはまともに考

えられなかった。

彼女は俺をじっと見つめた。そして、ニツコリと微笑む。

前に会ったことがあったか？ いや、こんな美少女を忘れられるはずがない。

或いは、俺が相手にしなかった女が全身整形で復讐しに来たとか？ いいや、そんな馬鹿なことがあるものか。これは現実の世界なんだ。ドラマじゃない。劇的なことは何一つ起こるはずがない。

彼女の顔が目の前に来る。人形のような整った顔、俺は魔法にでもかかったかのように動けなくなる。

頬に触れた冷たい手、触れる唇、ほのかな髪の毛の香り……キスを、されている。

なぜ、こんなことになっているのかわからない。けれど、このままもっと深く……そう思った時に唇は離れた。

初めてキスをした時だつてこんなに思いにはならなかった。馬鹿みたいに俺は安心していった。

そのキスの真意を確かめたくて、ぼんやりしたまま、もう一度彼女の顔を見た俺は凍り付くしかなかった。

鋭い瞳、冷たい表情、それはまるで氷の仮面だった。そして、彼女は酷薄に笑った。いや、仮面だったとすれば、それはさきほどの笑みの方だったのかもしれない。

「お前を殺す」

低く囁かれる声、それは愛の言葉なんかじゃない。甘美な響きはまるでない。毒だと本能が告げている気がした。

そのまま、彼女は隣を擦り抜けて去っていくのに、動けないまま震えていた。

それは、単なる捨て台詞じゃなくて、本物の殺し文句だったのかもしれない。あれが愛のないキスだったと気付いたのは、随分後のことだった。

何て格好悪いんだ。

次の日になっても、俺の気持ちは全く晴れなかった。むしろ、余計に曇っていった。もやもやしたものが胸の内に渦巻いてる。まるで、悪い夢を見た後のように。いや、きっとあれは悪い夢だった。きつとそうだ。

昨日と大して変わらない今日を何とかやり過ごした俺は、昨日のことであって放課後は遊ぶ気にもなれずに、珍しく真っ直ぐに家へと帰った。

一人暮らしのマンション、いつものように何も考えずに寝室へ行く。鞆を放り投げようとして俺はようやく異変に気付いた。

「おかえり、早かったじゃないか。今日は遊んでこなかったのか？」
彼女はベッドの上でニコリと笑った。昨日と同じように、綺麗すぎる顔で。まるで家族のような口振りで。

「な、何でお前が……！？」

俺は混乱する。これも悪い夢、その続きなのか。

「どうやって、この女はここへ入り込んだ？ どうして、俺は気付けなかった？」

「このベッドで何人の女を抱いたんだ？」

「抱いてねえよ」

彼女は俺の質問には答えずに質問で返してきた。思わず、答えてしまう俺もどうかしてると思うけど、男の部屋に上がり込んでベッドに座り込んで、そんなことを問う美女もどうかしてる。

「家には連れ込まない趣味か。なら、悪いことをしたな」

「心にもねえことを言うんじゃないか」

彼女は思ってもいないことを平気で言う。今まで相手にしてきた女だってそうだった。だけど、彼女の場合、うんざりするような不快感はなかった。尤も、それは怒りを感じないってことじゃない。

「随分ご立腹じゃないか」

「怒るに決まってるだろ！？」

彼女は平然と言う。この状況で怒らずにどうしろと言うのか。そ

もそも、彼女はわけのわからないことばかりだ。不法侵入に不遜な態度、そして、昨日のキスと殺し文句。

「何だ、童貞か？」

「そういうことを言ってんじゃない！」

彼女は笑うけど、俺は全く笑えない。笑えるものか。それに、断じて童貞じゃない。そんなものづくに脱してる。でなきゃ、不健全な付き合いなんてしてない。

「わかってるさ、お前が振られた昨日の女のことだって私は知ってる。趣味はいいとは思わないが」

「ふざけんじゃない！　つーか、テメエは一体何者なんだよ！？」

「私は私だ」

「答えになってねえ！」

どこまでも可憐で、女を感じさせる見た目に反して、全く女らしくない口調が尚更俺を混乱させていく。彼女が普通じゃないことだけはわかる。けれど、その正体はどこにも行きつかない。俺の理解できる域を完全に超えてる。

「あまり怒るな。うつかり殺してしまいそうだ」

「そうだ、それだよ！」

忘れてたけど、彼女は昨日俺を殺すと言った女だ。あの殺し文句だけは本物だったと思う。

「まあ、落ち着け。私も鬼ではないから、話し合いには応じてやる」
「だから、何で上から目線なんだ！？」

「愚問だな。私がお前の命を握っているからに決まっているだろ？」
「テメエは一体何者なんだって聞いてるだろ！？」

俺の気も知らないで、彼女は悠々としていた。何せ、突然現れて、キスして、殺すとか言う女だ。まともじゃないのはわかるけど、俺はそんなに暢気な性分じゃない。

「わからないか？」

「わかるわけねえだろ！」

彼女はじつとその大きな目で俺を見るけど、わかってたら、こん

なに頭の血管が切れそうなほど叫んだりしない。

「現時点でお前を殺す気はない。適当に説明してやるから落ち着け」

「テメエはさつきから何様のつもりなんだ！ 目的は金か！？」

「ガキの小遣いなどいるものか」

わざとらしく溜め息を吐いて彼女は言うけれど、落ち着けたら苦労はしない。わからなくて、どうしようもなくイライラする。はつきりしないことは大嫌いだ。

「整形して出てこられたってわかんねえんだよ！」

「整形？ 何の話だ？」

俺は思わず叫んだ。叫んでしまった。その瞬間、彼女の眉間に皺が寄る。いかにも、予想外って顔で俺の方がビックリしたくらいだ。
「お前……俺に恨みとかあるんじゃないかねえのかよ？」

何となく恐る恐る俺は問う。本当に彼女がわからない。今まで会ったことのないような人種だった。

「私にとってお前など無でしかない。くだらない妄想だ」

「ひどい言い方をするな」

彼女ははつきり言い切った。俺だっここにいる、二人つきりなのに、その目に俺を映しておきながら、全く見えていないかのよう

に。
「さっきの答えだ。私は暗殺者…… と言えば聞こえはいいが、ただの人殺しだ」

彼女はさらりと答える。だけど、俺はその言葉が冗談だとは思わなかった。そう言った彼女の目に偽りなんてなかった。その目だけで殺せると言っているかのようでもあった。

「じゃあ…… 親父、かよ？」

急に力が抜けた俺は床に座り込んで問う。そして、彼女の唇の端が吊りあがる。肯定、ってことか。

「言つとくけどな、親父は俺のためには絶対に動かねえよ」

彼女が親父への脅しのために俺に近付いたとしても、親父は多分動じない。でなきゃ、あんな仕事やってないと俺は思う。そう親父

の巽^{つひ}央は政治家だ。

それに親父にはもう一人、将来有望どころか、既に出来の良さをまざまざと見せつけてる息子がいる。俺の十七年上の兄貴^{おにい}央理も既に政治家だ。

「少しは頭も使うんだな」

「それしか考えられねえだろ」

感心したように彼女は言うけど、流石に俺を殺すためにわざわざ暗殺者を雇う奴もいないだろう。恨みの対象が俺でなければ話は簡単だった。

「整形女の復讐劇を考えてたくせに」

「普通、暗殺者がやってくるとは思わねえだろ。ドラマじゃあるまいし」

「それほどお前はひどいことを女にしてきたのか？ 殺されても不思議じゃないようなことを？」

「だって……親父は、親父だ。それに、人質に取られても何の弱みにもならない俺が、そのせいで暗殺者に付き纏われるなんて、まずありえねえ」

彼女は言う。だけど、彼女に俺の気持ちがかかるはずもない。俺にだって色々ある。俺との遊びに本気になるような馬鹿な女が何を考えるかも彼女にはわからない。そして、俺が親父をどんな気持ちで見てきたかも。

「随分、落ち着いたじゃないか」

「わかんねえよ。現実味がなさすぎてどつか麻痺したのかも」

言われて、俺はイライラが収まったのに気付いた。結局、全部、彼女が正体不明のせいだった。彼女が暗殺者だってわかってても、驚くとか、怖がるとか、そんな気には全然なれなかった。だから、彼女は普通じゃないのかって納得したぐらいだ。

「さて、はつきりしたところで今日の夕食は何だ？」

「今日は……って、何でだよ？」

彼女の問いに俺は普通に答えそうになって、気付いた。なぜ、彼

女がそんなことを気にするんだ？

「今日からここに住むからな」

「は？」

「お前を監視するために私はここで暮らす。お前に拒否権はないが、寝るのはソファで我慢してやるから安心しろ」

「ふ、ふざけんじゃねえ！」

俺は多分淒く間抜けな顔をしていたんだと思う。彼女はいかにも面倒臭そうに説明してくれたけど、「はい、そうですか」はありえない。

「どうせ、女は連れ込まないんだろ？ 困ることなどあるものか」

「どうして、人殺しと一緒に住まなきゃいけないんだよ！」

「言っただけだ。お前に拒否権はない。私が決めることだ」

彼女は俺の気持ちなんて全く無視だった。困ること？ そんなの大有りに決まってる。何で、この俺が、いくら暗殺者だからって、女の言いなりにならなきゃいけないんだ！

「私はレイン」

不意に彼女が言った。

「レイン、それが私の名前だ。よろしく、リオ」

「レイン？ 変わった名前だな。そりゃあ、純日本人なのにオリビアとかライアンってヤツとかいるから不思議でもねえけどよ……あ、コードネームか？」

てつきり純日本風の名前が来ると思っていた俺はちよつと呆気に取られた。

レイン……雨、なんて合うような、合わないような。正直、俺のリオなんて女の名前みたいだし、日本っぽいかって言うと微妙な気もするけど。

「雨の日に拾われた。だから、レイン。それだけのことだ」

「単純だな」

「そんなものさ」

淡々と言うレインになぜか俺の方が寂しくなった。俺にとって親

は当然の存在だけど、誰しもがそうではない。一般の家庭に生まれた平和な子供が暗殺者になるとも思えない。

「って、よろしくじゃねえよ！」

一歩も二歩も三歩も遅れて気付いた。誰が暗殺者とよろしくできるか！ 騙されるな、俺。

「よし、今晚はピザだな」

「勝手に決めるな！」

一体、何がよしなんだ。そして、何でピザなんだ。彼女がどこからともなく取り出したのは多分俺が電話台に置いてたピザ屋のチラシ、たまにダチが遊びに来た時ぐらいにしか頼まないけど。

「つーか、暗殺者のくせにピザなんか食べたいのかよ……まあ、たまにはいいか」

レインはわけわかんないけど、最近は食べてなかったと思うと食べたくなる。

そうして、俺と美少女暗殺者の奇妙な生活は始まってしまったのだった。

それから数日、レインはすっかり俺の生活の一部になってしまった。当たり前みたいに彼女との朝が始まり、夜が終わり、また朝が来る。

特に身の危険を感じることもなく、どちらかと言えば護衛のような気がしている。歳も近い彼女との生活は妙に楽しかった。

ただし、俺が学校に行っている間、レインが何をしているのかはよくわからない。学校に潜入してくるわけでもなく、俺の漫画を読んだりDVDを見たりCDを聴いたりして過ごしているらしいが、それが全てじゃないことはわかってる。

レインには仲間がいるのだろうか。上司がいるのだろうか。依頼主とは会っているのだろうか。依頼主は一体誰なんだろうか。

疑問はそれこそ雨のように降り注いでくるけど、彼女にぶつけら

れそうになかった。きつと、もうとつくに後戻りできない状態になっているのに、聞いたら袋小路に追い込まれる気がしていた。

だから、仕事のことは絶対に興味本位では聞かないことにしていた。

けれど、そんな俺の疑問の一つは勝手に答えがやってきた。

ある日、俺はレインと街に出ていた。休みの日に家でダラダラしてても退屈で、外でフラフラした方がましだと思ったら、レインもついてきた。だから、二人でファーストフードを食べたり、服を見たりしてみた。レインはポテトが時間が経つと急速に不味くなることに文句を言っていた。けれど、そんなことが楽しかった。

そして、思ったことが一つある。絶対に口に出しては言えないけど、レインは意外と可愛い。見た目じゃなくて中身が。きつい性格をしてると思うけど、それだけじゃない何かがある。それは、もしかしたら、“人間らしさ”というもののなのかもしれない。

次はどこに行こうかなんて言ったら、不意にレインが立ち止まり、振り返った。

「レイン」

呼びかけるその声に俺も振り返った。そこに立っていたのは若い男だった。

多分、俺よりもちょっとだけ年上、背が高く、引きしまった肉体に、日本人離れた顔立ちをしている。金に染めた髪、まるでライオンのような風格の男だった。

「レオ、そっちの仕事はいいのか？」

「ああ、問題ねえよ」

レインが問いかければ、レオはぶっきらぼうに答えた。

「レイン、こいつは？」

「私のパートナーのレオだ。拾われた時、人食いライオンみたいだったから、レオだそうだ」

「やっぱり、アレなんだよな？」

「ああ、アレだ」

何となく想像はついていたけど、俺は一応聞いてみた。レインのパートナー、つまり、このレオもレインの仲間、暗殺者だってことだ。

「まあ、お前ならターゲットに情を移すこともねえか」

レオの言葉は俺の胸に突き刺さった。今まで吐きかけられたどんな言葉よりも。いや、二番目だ。その冷たい眼差しもあの人には及ばない。あの人は暗殺者じゃないけど。

「またすぐに一緒にいられるようになるな」

多分、レオはレインが好きなんだ。そう思った。レインは「女々しいことを言うな」なんて言ったけど、俺は彼女にとってターゲットの息子に過ぎない。

俺が、どんなにレインを可愛いと思ったって、その毒舌が心地よいと思ったって、もう一度キスをしたと思ったって、今度は俺からしたいと思ったって、ずっと一緒にいたいと思ったって、レインは簡単に俺を殺せる。俺の心も体も打ち碎ける。俺が女をあしらってきたように。

だって、彼女がくれたあの冷たいキスは死の口付けだったのだから。

K i s s A w a y

レオに会ってから俺の心はすっかり冷めていった。多分、俺は浮かれていたんだ。レインは俺に「殺す」と言って死の口付けを送った。俺がどんなにレインを好きになっても彼女が俺を好きになることはありえない。

今日は何となく帰り辛くて、大して絆のない友達と遊んで遅くなった。だけど、何も面白くなかった。思い浮かぶのはレインのことはかりだった。

「遅かったな」

帰るとレインはベッドを占領していた。その周囲には漫画が散乱している。

食べて帰るって連絡したから、レインは勝手にカップラーメンを食べたらしかった。

そうしていると、レインは本当に普通の女の子みただった。俺に負けず劣らず無為な生活をしているような気がして、滑稽だ。

彼女は暗殺者なのに。そう、人殺しの犯罪者、許されない存在。なのに、人間臭い。

ベッドに近付くと、レインはゴロンと転がって俺を見上げる。髪がはらりと落ちて、耳が見えた。そこには銀色のドクロがいた。小降りだけど、とても女の子が付けるピアスじゃないと思った。

「随分ごついピアスしてるんだな」

「ああ、あいつと同じだからな」

「レオと？」

可憐な見た目に反してハードなレインなら不思議ではないと思ったけど、聞かなきゃ良かったと思った。

何となく手を伸ばして見たけど、ピアスは左耳にしかなかった。

「何か同じものを持っていたいと言うから片方だけ貰うんだ。女々しい奴だろ？」

レインは笑うけど、俺は笑えなかった。

レオはレインが好き。だから、ささやかで、確かな主張をするんだ。

今、レインの側にいるのは俺、でも、あいつにとって俺は障害じゃない。やがて、死んでいくターゲット。本当にそれだけだ。

だから、俺はレオにはなれない。

レインは起き上がる。艶やかな髪の毛はぐしゃぐしゃだった。

「楽しんできたのか？」

「まあ、な」

レインは問うけれど、本当のことは言えなかった。曖昧な言葉でごまかしても、レインはそれ以上聞かないとわかっていた。

「楽しめる内に楽しんでおけ」

その言葉は重くのしかかった。だって、裏があるから。

「その内、楽しめなくなるから？」

聞かない方が良いのかもしれない。けど、俺は聞いてしまった。悔しくて、悲しくて、苦しかった。

「そういうことになるな」

歯切れの悪い答えに一体どんな意味があるのかわからなかった。

結局、また時は過ぎて行く。何も変わらなくて、それが不安になる。

いつまでこんな日々が続くのか。

いつまでレインと一緒にいられるのか。

いつまで俺は生きていられるのか。

母さんから連絡があってまた不安になる。一応、心配してくれて

いるらしく、たまに連絡を取るけれど、特に変わった様子もないようだった。でも、たとえ、女の子と同棲していると言ったとしても母さんは驚かない気がした。言えるはずもないけれど。

「親父に脅しをかけているつもりなのか？」

「そうかもしれない」

母さんとの電話が終わった後、俺は何となくレインに問いかけてみたけれど、返ってきた答えはあまりに曖昧だった。

「おびき寄せられるとも思ってるのか？」

「どうだかな」

「わけわかんねえ」

ターゲットが親父だとして、最早親父は俺に興味なんてない。俺の側にいたって何にもならない。

「なあ、いつまで一緒にいられるんだ？」

何となく問いかけてしまった。我ながら馬鹿な質問だったと思う。自分を殺すと言っている相手と一緒にいたいだなんて、あまりに滑稽だ。

けれど、レインといると落ち着く。それは事実だ。

「何だ、私に惚れたか？」

レインは笑った。でも、笑い事じゃない。まったく、笑える話じゃないのが現実。

「そうだと言ったら？」

はつきりとは言わずにほめかしてみた。俺がレインを試すなんて、それもまた変だと思ったけれど、何だか悔しかった。俺だけが振り回されている。

「おおよそ恋というのは勘違いだ。真実の愛があるとして、それを見付けられる可能性は限りなく低い。誰もが巡り合えるのならば、この世は平和だ。そう反吐が出るほど平和な世界になってしまっさ」
歳は俺と大して変わらないくせに、愛だ恋だと語るレインは哲学

者にでもなつたつもりか。

「暗殺者も存在しない？」

「そう、きつと、私という哀れな存在も生まれないさ」

平和じゃないからレインは存在する。だけど、哀れと言われても、俺にはレインがどんな人生を送ってきたかなんてわからない。

「雨の日に拾われて安直な名前付けられたりも？」

「本当に愛されて生まれてくるのなら、ないだろうな。真実の愛は永遠らしいからな」

拾われたということは、捨てられていたということ。本当の名前もきつとわからないのだろう。

「俺を殺したら、どこに行くんだ？」

聞いたって意味のないことなのかもしれない。死んだら、俺は聞くことも、見ることもできないから。

「わからない。私達はどこへでも行く」

“私達”——レインの仲間のことはわからない。でも、間違いなくそこにはレオが含まれている。

レオはレインとずっと一緒にいられるに違いない。だって、レインはパートナーって言ったから。レインにその存在を認められているから。

「いつになったら、俺を殺すんだ？」

ついに核心に触れてしまった。多分、それは一番聞いてはいけないこと。

「自分の残り時間が知りたいのか？」

「違う。レインといられる残り時間だ」

レインは笑ったが、俺は本気だった。知ってしまえば、少しは後悔なく今の時間を生きられる気がした。

けれど、レインは声をあげて笑った。

「馬鹿な男だな。私といたって何もいいことなんてない。私が消えればお前は清々する。今までのことは全て夢だと思って、いずれ忘れる」

レインの言葉は淡々としていた。でも、レインはわかっていない。俺の気持ちをわかっていない。

「いやだ、離れたくない！」

まるで子供だ。自分でもそう思う。それでも、レインの側にいられるなら俺は子供のままでもいいなんて思った。

レインは固まったように見えた。急に無表情になつて俺は怖くなつた。

だけど、急に頭を抱えるように自分の髪をぐしゃりと掴んで、表情を歪めた。

「……まいったな、こんなのは初めてだ」

俺にはレインが迷つたように見えた。あるいは、そう思いたいだけなのかもしれないけれど。

「今まで何人もの要人暗殺に関わってきた。だが、今回のようなケースは何もかもが初めてだ。私も戸惑っている」
やがてゆっくりとレインは語り出した。けど、半分は本当で、半分は嘘のような気がした。

「そうは見えない。俺だけが一人で馬鹿みたいに振り回されてる」
俺が言うと、レインはニヤリと笑った。

「私はプロだからな」

「そんなのずるい」

いつだって、レインの感情は俺には見えない。きっと、俺の感情はレインには筒抜けなのにフェアじゃない。暗殺者に公平さを求めるなんてどうかしてるのかもしれないけど。

「お前はとても面白い男だな、リオ。初めてだよ」

目を細めて、レインが笑った。それはレオとは違うと言われているような気がして少しだけ誇らしく感じられた。だって、レオは“普通の男の子”じゃない。

「お前は俺を退屈させないよ。いい意味でも悪い意味でも」

初めて会った時レインは俺に問いかけた。「退屈なんだろう？　リ

オ・タツミ」と。そして、レインは本当に刺激的だ。

「安心しろ——お前は私が守る。必ずだ」

レインが急に真剣な顔で言った。だけど、それは俺を混乱させる意味がわからない。守る？ 俺は聞き間違えたのか？

「それって、どういう意味だ？」

「お前は何も気にしなくていい」

問いかけたところで、レインは答えてくれなかった。

「だって、俺を殺すんだろ？」

「知らなくていいんだ。いや、知るべきではない。あるいは、知ってほしくないのかもしれない」

そうレインは「お前を殺す」と言った。なのに、何で今更守るなんて言うのか。何で、当事者の俺を部外者にしようとするのか。

「お前の側にいてやるってことだ。素直に喜べ。いや、泣いて歓喜しろ」

からかわれているのか。

今日のレインは何か変だ。そう思ったけど、それ以上は何も聞けなかった。

レインに真相を聞こうとしてはぐらかされ、日々もやもやが増えていく。

こんな状態で一緒にいたいわけじゃない。だからと言って、このままレインがいなくなるのは嫌で、俺はただ耐えるしかなかった。

そんなある日、また母さんから電話がかかってきた。父さんに何かあったのかなんておもったけど、『もしもし？ 理央？』という母さんの声はいつもと全く変わらなかった。

「何？ 母さん。この前、話したばかりだろ？」

もつと愛想良くした方がいいのかもしれない。でも、俺にはこれが精一杯だった。だって、母さんに話すことなんて何も無い。

『パパがたまには帰ってこいって言っているのよ』

「別に家出してるわけじゃないし、ちゃんと連絡とってるだろ？」

『だからよ、あなたは私達の息子だもの』

わけがわからない。別に親と喧嘩してるわけじゃないし、親父がそんなことを言うなんて今までになかった。「好きにしる」ってそれだけ、色々取り決めをしたけど、別に逆らうようなことはしていない。大体、その取り決めは俺が親父に対して決めたことだ。「必要以上に干渉するな」ってこと。

「なら、正月にでも顔出すよ」

面倒臭い。先の話でもしておけば、それでいいだろうって思った。『今度のお休みに会いたいって』

「何だよ、急に」

急すぎる。自分の死期でも知ってしまったのかと俺は思った。でも、そんなことは母さんには言えない。

『それでね、パパが友達を連れておいでって言っているのよ』

「友達？」

母さんは俺の疑問なんて無視して話を進めた。友達って誰だ。一体、何を考えているのか全然わからない。

電話の向こう親父が何かを言っているみたいだった。

『そう、最近一緒にいる子？ 女の子なの？ 長い黒髪の』

その言葉に俺は心臓が跳ねるのを感じた。電話で良かった。多分、母さんには俺の動揺は伝わっていない。

「何で親父が知ってるんだよ？ 監視は付けないって約束だろ？」

たとえば、離れていても監視はしないこと。それが親父と俺の約束だったのに、何で親父が知っているのか。

『お付き合いしている子がいるなら教えてくれればいいのに』

「友達だって！」

『あら、ムキにならなくてもいいのに』

母さんは凄くのんびりとした様子で言う。別に長い黒髪の女と同棲していたって、付き合ってるわけじゃない。相手は暗殺者、俺の命を狙っているはずだった。

「あのさ、あ、兄貴は？」

家に帰るのは仕方がないとして、一つだけ心配なことがあった。本当に親父の自分の死期を悟って、家族を勢揃いさせてしまうことだ。いや、別にもうボケたじいさんとかばあさんとかは結婚だ何だと騒ぎ立てたところで、問題じゃないけど、兄貴だけは困る。きつと、兄貴も嫌がる。

『央理は忙しいのよ』

「そう……」

ほっとしたなんて母さんには言えない。でも、本当にほっとした。母さんに俺の気持ちはわからない。わからなくていい。

『じゃあ、御馳走作って待っているからね』

母さんの声はいかにも楽しみにしていると言うように弾んでいた。俺の心が重くなるのも知らずに。

レインに話すのも正直気乗りがなかった。でも、レインは俺の話した内容で何となくわかってる気がした。

「あのさ、親父がお前を連れて遊びにこいつて言っているんだ」

疑問は残るけど、言うしかなかった。隠すことはできない。

「いいだろう。行こう」

レインは快く、本当に気持ち悪いほどあっさりと返事をした。

そして、俺ははっとした。

「お前、チャンスとか思っていないよな？」

親父と会うことはレインにとって好機のはずだ。でも、俺にとっては多分最悪の事態。

「母さんの前では殺すなよ」

無駄だとはわかってたけど、一応、言ってみた。

たとえ、親父の暗殺が避けられない結末でも、母さんにだけは傷付いてほしくない。

「死ぬ時は皆一緒かも知れないだろ？」

「一家心中か？」

レインが悪役っぽくニヤリと笑った。だから、俺も同じように笑ってみた。だって、レインは約束したから、俺を殺さない。

「巽央理がないのが、残念だがな」

一家心中には役者が足りない。だけど、兄貴がいるなら、俺は必要ない。どちらか一人でいいのが俺達、いいや、本当は兄貴だけで良い。俺がいなければ全て上手くいったはずだから。

心変わりの電話を待ってみても、雨乞いしたりしてみても、無駄だった。予定に変更なし。

そして、約束の日はすぐに来てしまったわけだ。

レインは「かの有名な巽央に会うのに小汚い格好はできないだろう」とか言って俺に服を買わせやがった。どうせ、高い報酬貰ってるくせに。「たまには貢げ」とか言いやがった。

そんなわけで、今、俺の横にはピンクのワンピースを着たいかにも母さん好みのほんわりした清楚な美少女がいるわけだ。すっげー複雑な気分。

「よく来てくれたね。理央の父の央だ」

何を考えているかわからない親父が後援者向けの笑顔を見せた。

俺の嫌いな笑顔、でも、仕方ない。

「母の理子です」

「真田レインです」

母さんはにこにこ笑顔でレインを迎えた。そうしたら、レインも恐ろしいほどに可憐な笑みを見せた。

そう言えばそうだった。この女、ごついピアスが見えなくて、ミリタリーでボーイッシュな格好じゃなければ本当に暗殺者だっていうのが信じられないぐらい普通の美少女だった。

って言うか、真田って何だ。名字があつたなんて聞いていない。いや、待て、こいつは昨日戦国物のゲームをやってたかったか？

まさか、真田幸村の真田？

「可愛らしいお嬢さんじゃないの。いつからお付き合いしていたの？」

母さんはマイペース。凶悪なくらいにマイペース。お花畑のような我が道を行ってる。

これにはレインもちょっと困ってた。

「だから、違うって！」

「リオは本当に照れ屋さんで……でも、いい子なのよ」

俺の否定も空しく、母さんは「この手を離さない！」的にレインの手を両手でがっちりと掴んでいた。

でも、レインの手は人殺しの手、俺は実際にレインが人を殺したところを見たわけじゃないけど、本当だと思ってる。

「母さん、お客様が困っているぞ」

「あら、私ったら、うちには女の子がいないものだから嬉しくって……！今日はゆつくりして行つてね！」

後ろから親父が言った。でも、母さんは一向に離す気配がなかった。絶対にすぐには帰してもらえそうにない。

母さんの用意した御馳走は度を超えていた。この量を一体誰が食べるんだ。

完全に一人だけ浮かれてる。いや、浮いてる。

こんなに喋る人だったかってくらい話していた。親父はたまに一言二言喋るくらいで変わった様子はなかった。

だけど、そんな穏やかな空気も長くは続かなかった。

急にレインが立ち上がって、カーテンを引いた。そして、親父の腕を掴むと、部屋の奥、扉の方へと突き飛ばすように追いやった。

「地下の部屋に隠れる」

低く鋭い声、俺は困惑した。すぐに親父に腕を掴まれ、混乱はひどくなる。

何も起きていない。なのに、何かが起きている。

「早くしろ！一家心中する気か！？」

レインが声を荒らげるのを初めて聞いた気がした。その手には黒い物が握られていたように見えた。

親父は俺と母さんの腕を掴んで、引きずるように部屋を出た。

俺は扉の閉まる音と同時に窓ガラスが割れる音と銃声を聞いた気がしたけど、わからなかった。

地下室にいる間、俺は情けないことに震えていた。親父は「大丈夫だ」って繰り返すだけでそれ以上は何も言ってくれなかった。

母さんは何も知らないだろうに、ずっと俺を抱き締めてくれた。凄く安心するのに、離れなきゃいけない気がするのはいつだって兄貴のことがちろつくからだ。

何もわからないまま、どれだけ時間が経ったのかはわからなかった。

地下室にやってきたのはレインだけじゃなかった。なぜかレオも一緒だった。

レインは親父と母さんに暫くホテルに滞在するように言い、護衛にレオを付けるとも言った。そして、親父は素直にそれを受け入れていた。

俺はレインと帰ることになったけど、帰り道はずっと混乱していた。

帰り際見た時、ダイニングの窓は割れ、母さんのお気に入りのかーテンは裂かれて、御馳走は無残な姿になっているのがわかった。

何があったのかレインは言わなかったし、何で地下室があることを知ってたのかもわからない。

家に帰ってから小さな震えが治まらなくて俺は頭を掻き毟った。

「何だよ、何なんだよ……」

俺は繰り返す。わけがわからない。本当にわけがわからない。

「言っただろう？ お前は私が守る」

安心させようとも言ったのか、レインは言った。だけど、安心で

きるはずがない。

「わけわかんねえよ！ お前は俺を殺しにきたんじゃないのかよ！？」

レインは俺に「お前を殺す」と言った。なのに、守ると言ったり、わけがわからない。

この問題は、今、はっきりさせなきゃいけない。

そう思ったけれど、レインに抱き締められて何も言えなくなった。

「大丈夫だ、リオ。私がいる」

そう言っ、レインは俺の額にキスをした。まるでそうすることで俺の中の恐怖を拭い去ろうとするかのように。

そうして、俺は泣いた。わけもわからずに泣いた。

きつと、怖かったんだと思う。自分の知らないところで何かが変わり始めていて、俺はそれに巻き込まれているから。

K i s s G o o d - B y e

あれから、レオは毎日律儀に連絡を入れてくれた。多分、レインの命令だろうけど。

母さんは少し混乱しているけれど、親父も無事らしい。

俺はレインと一緒に変わらない日々を送っている。もしかしたら、俺の知らないところで何かが変わり始めているのかもしれないけど、ガツンと来るまではわからない。人生なんてそんなもんだ。神のみぞ知るってこと。尤も、レインなんかを見てると神なんかいないってのがよくわかる気がする。

そのレインはいつになく険しい表情で銃の手入れをして、腰のホルスターに収めた。

こんなに物々しいのは初めてで、この前、撃ったのか聞きたくてもできなかった。そんな雰囲気じゃない。

だって、本当は踏み込んではいけない世界が確かにそこにあるから。

レインはどこからともなくナイフを取り出して、刀身を見詰めた。まるで鏡のような輝きの中に映る自分を見詰めてるのかもしれないかった。

どれだけこいつは武装しているんだ。

それに、やっぱり手慣れている。

その目もまた刃に似ている気がした。

暗殺者をこんなにまじまじと見ることもなんて中々あることじゃないし、あっちゃ困るだろうけど、不思議な気分だった。

いや、俺の中でレインは特別だけど、暗殺者じゃない。

「レイン」

ずっと、ナイフを見ているレインに俺は問いかけてみた。聞いたことは山ほどあるのに、相変わらず言葉にならなかった。

「……妙なんだ」

「え？」

「何かがおかしい」

ぼつりとレインが言った。

レイン自身、困ってるような、迷っているような、そんな感じで。

「……お前の他に親父を殺したい奴がいるってことか？」

必死にレインの言葉の意味を考えて、問いかけた。

レインは親父を守った。そういうことになった。

自分の獲物だから、自分の手で殺すために守ったのか。

真実はわからない。けれど、今もレインのパートナーのレオが親父と母さんを守っている。

それもまたビジネスなのかは俺にはわからない。所詮、暗殺者の世界なんて一般人にはわからない。わからせてもらえないから。

「私は調べたいことがある。少し離れるが、必ず戻ってくるからな」俺の心なんて見透かしているだろうに、敢えて触れずに、ナイフをまたどこかにしまつてレインは立ち上がった。

そうやって、レインは容易く俺の追求から逃れられる。

俺だけが空回っている。いつだって。

「お前は安全だ。誰にも殺させない」

言いたいのはそんなことじゃない。

聞きたいのはそんなことじゃない。

なのに、レインは出て行ってしまった。

俺の頭上に疑問の雨を降らせたまま。

彼女はやっぱり夕立に似ている。急に降り注いで、急に去っていく。俺の頭上に暗雲をもたらし、ゴロゴロと雷を鳴らす。

いや、夕立っていうと何か格好いい感じがしてむかつく。どっちかっていうと、ゲリラ豪雨とかの方がしっくりくる。それくらいレインはいきなりで、ちょっと猟奇的。

そんなことは大して問題じゃないけれど。

理央のマンションを出たレインは周辺に張っていた仲間からの目配せにうんざりした。

レオには既に仕事を言い付けてある。それに、彼はこの仕事だけは引き受けてくれない気がした。

尤も、その仲間に頼むのも非常に不本意だったが、借りを返してもらった時期でもあったのだ。きっと、今でなければ一生返してもらえない。

そして、自分でも危険がないか慎重に探りながら、レインは情報が得られそうな場所を目指した。

街は忙しない。一人の少年が運命を翻弄されていることなど知りもしない。

喧噪は平和だ。きっと、墮落の臭いに紛れて、硝煙に臭いにも血の臭いにも気付かれることはない。

だけど、その腐敗臭の中の微かな獣の臭いに気付く、同じ種類の獣がいる。同じ匂いの染み付いた獰猛な者が。

「よお、“雨女”」

友にでも接するような気安さでその男は声を掛けてきた。

年上はレインよりも少し上、セミロングの漆黒の髪を跳ねさせ、ファーのついたレザージャケットを纏ったワイルドな印象の男、獣の皮を被った獣……

「そう呼ぶのはやめろ、不愉快だ。
ブラック・パンサー
“黒豹”」

レインは“黒豹”を睨む。
殺気を見せない。けれど、この男がいつでも自分を殺せることを

レインは知っていた。それはレインにとっても同じことだからだ。プロとして、見境のない素人のような真似はしない。どちらにもプライドがある。

「じゃあ、今度から“アメフラシ”にしてやるうか」

彼はまるで自分が有利であるかのように笑う。余裕と確信があるからこそ、いつだってこうして自ら絡んでくるのだ。

「言い間違えた。お前の存在が不愉快だ。消えろ、クロサキ」

「ヒョーゴでいいって言ったのに、相変わらずお堅いね」

“黒豹”ことクロサキ——黒崎兵吾はレインと同じく暗殺者だが、属する組織が違う。協力関係にあるわけでもなく、場合によっては殺し合いも有り得る。そういう危うい関係を彼は楽しんでいる。

「お前は今回の件、どう見てるんだ？」

路地裏に移動して黒崎は問う。

レインは彼が知っていることに驚きはしない。先日、巽邸を襲撃したのが彼と同じ組織の人間だということはわかってるからだ。

「私は任務を遂行するだけだ」

答える義務はない。情報を共有する必要などないのだ。

「いいことを教えてやるよ」

誘惑するように黒崎は言う。

レインが「必要ない」と即座に返せば、彼は「そう言っなよ」と大仰に肩を竦めて笑った。

この男の全てはわざとらしい。

「お前の利益はどうなる？」

自分の組織の情報を漏らせば、彼には不利益があるはずだった。しかし、黒崎は尚も「心配ありがとうよ」と笑い続けた。

「でもな、俺はこんな不毛なことでお前と殺し合いはしたくねえんだ」

黒崎はまるで友を失いたくないとでも言いたげだった。

だれ、レインは心を痛めているかのような口振りに惑わされるつ

もりはなかった。

乗せられているは明白だったが、レインはそれよりもその先にあるものが気になってしまった。

「どういうことだ？」

「よし、興味を持ったな？」

ニヤリと黒崎が笑えば、レインは一瞬後悔もしたが、すぐに同じようにニヤリと笑ってみせた。

「それはやっとお前を殺す理由ができるということだろ？」

殺し合いがしたくないと言うならば、今度こそ殺し合いに発展する事態が待っているということになる。

面倒臭い人間は少ない方がいい。レインは黒崎のようにジャンキーじみて、スリルを好んだりはしない。何事も程々がいいのだ。

「つたく、殺し合いが好きなんて、どうかしてるぜ。こんないい男を前に裏切りの一つや二つ、考えてみたらどうだ？」

「言っただろ？ クロサキ、お前は不愉快だ。非常に」

黒崎は軽薄な男だ。対立する組織の暗殺者にちよっかいをかけた口説いたり、それでいて底が見えないからこそ不愉快なのだ。

「お前の護衛対象だが…… 幸せにはなれねえぜ。どの道、誰かは死ぬだろうよ」

物事の裏の裏まで嗅ぎ付けるのはやはり獣のようだ。黒崎のそういうところをレインは苦手としていた。

それは単なる冗談ではないのだ。レインもまた感じていることだった。

「お前のところと私のところで動いているんだから仕方ないだろ」

二つの組織が動いている現状で、物事が平和に解決することはありえない。

「まさか、偶然だなんて思っちゃいねえだろうな？」

巽央は悪人ではない。しかし、人間どこで恨みを買つかかわらないものだ。

だが、この状況は何かがおかしい。裏で何かが起きているとレイ

ンも感じていた。

「不愉快極まりねえ話だ。お前と被るなんてよ」

言葉を返すように黒崎は言う。

だが、両雄は並び立たない。このまま裏社会のトップ組織であるレインの組織と黒崎の組織が共に存在し続けることはまずありえない。

「お前を殺せば済むだけだ」

遅かれ早かれ殺し合わなければなくなるだろうとレインは感じている。潰し合いに応じる気配が組織にはあるからだ。

「なあ、本当の依頼はどっちだろうな？」

「本当の依頼、か。どちらかがダミーで、私たちを衝突させたいとでも？」

核心に迫るような黒崎の言葉。だが、レインは自分の心を見せるつもりはない。あくまで好戦的に構えていた。

「わかってるんだろ？ お前の依頼主」

痺れを切らしたように黒崎は言うが、レインは「私たちはただ遂行するだけだ」と頑なな態度を取る。

どうであろうとレインにとって、この男は面倒なライバルでしかない。

この男の誘惑に負けたら何もかも失ってしまう。

抗うことだけが、最良のコミュニケーションであり、護身術だと気付いたのはいつだったか。

「お前ならわかってると思ってたよ。わかってて、踊ってるって」

「買いかぶり過ぎだ」

「お前のことならわかる」

当てこすりの関係、ギリギリのスリル、或いは恐れているのかもしれない。彼のサディスティックな本性を。

「何かあったら言え、協力してやる」

ニツと黒崎は笑い、レインは溜め息を吐きなくなった。

協力などありえない間柄なのだ。損はあっても、得はない。

味方なら心強い言葉だが、敵に言われても信用できない。この男の場合、罠であることも明白だ。

「お前がそんなに死にたがりだとは知らなかった」

レインは呆れてみせた。段々、黒崎のちょっかいがエスカレートしていることはわかっていたが、気に入られて嬉しいタイプではない。

だが、今日の黒崎は何か違った。それも作戦なのか、眉を顰める様子はいつもとは違う。

「気に食わねえんだよ。あいつらの思い通りになりたくねえ。お前もそうだろ？ 大体、こつちだって、本気で動いちゃいねえし」

黒崎はよく喋るが、不用意に喋るような男ではない。しかし、今日は自分の組織を自棄になって垂れ流しているようにも見える。けれど、レインは何があってもこの男だけは信用するつもりはなかった。

「まったく、お喋りな男だな。そんなに喋りたいのなら、ダムを決壊させるきっかけを作ってやろうか？」

ホルスターから何度となく彼に向けてきた愛銃を抜き、銃口を膝に向ける。

それはこれ以上、付き合うつつもりはないという意味を表していたが、無駄だった。

「俺はゲロしねえよ。愛の言葉なら声が囁れるまで叫んでやってもいいが……それとも、案外純情なお前が耐え切れないほど卑猥な言葉を吐き続けてやろうか？」

この男は素人ではない。どんな拷問にも屈しないだろうとレインは思っている。それこそ、言う通りのことを実際にやりかねない。

「巽理央、あいつに惚れてるんだろ？」

「そんなんじゃない」

「まあ、いいんじゃないの？ あの猛獣が許してくれねえと思うけど」

まるで、学生のようなやりとりだが、普通の恋などまずありえない

い。

「お前は本当に不愉快な男だ」

本当は最初から何もかも知っているから不愉快なのだ。

「お前がいつまでも強がつくれちゃうから、つい可愛がりなくなるんだよ」

それはいつも女に見せる笑みだろうか。何となくレインは考えてしまった。そうして、容易く獲物を手に入れて、壊してきたのだろう。

この男は笑顔で獲物を蹴るような男なのだから。

「殺し合いが好きなのはお前の方じゃないのか？」

この男とこうして話すのはこれが最後なのかもしれない思いながら、レインは問いかけてみた。

無駄なことだとはわかっていた。けれど、気の利いた別れの言葉が浮かぶはずもない。

「まだまだお前とは遊びの関係でいたいんだよ。お前がいるって思うだけで俺はかなり興奮できるからな」

勢いに任せて、危険な遊びに身を投じる若者のような無謀さがまだ彼の中にもあるかもしれない。麻痺する感覚の中で、それだけが鋭い痛みを与えてくれる。

いつだって、黒崎には陰りを感じていた。裏社会に身を投じるという者の空気というわけではなく、暗黒面というには少し語弊がある。

今なら、それが少し理解できる気がする。とレインは思った。今なら、その違和感の名がわかる。

レインが今正に感じているものだからだ。

俺を置き去りにしたレインが帰ってきたのは夕方だった。

その手には食欲をそそる臭いを部屋に充満させるビニール袋、駅前のタコ焼き屋のものだ。

そして、同じく駅前のシュークリーム屋の紙袋もある。おやつのもりなのか。

「土産だ、食え」

「あ、ああ……さんきゅ」

別に頼んじやいないし、聞きたいのはそんなことじゃない。けれど、その誘惑には勝てなかった。

おやつっていうような可愛い量じゃなかったけど。

レインと飯を食べるのは初めてじゃないのに今日は妙に緊張した。調べものは済んだのか？」

話題を探そうとしてもみつからなくて、一番聞いちゃまずいことを聞いてしまった。

「……本当にこんなのは初めてだ」

レインは少し顔を顰めてから言った。

一体、何があったのか。

問い詰めてもレインは絶対に言わないと思うけど。

「まさか、御家騒動……いや、そんな上等なものじゃないか。ただのくだらない喧嘩に巻き込まれるなんてな」

何のことか、俺にはわからなかった。わかるはずもない。きっと、レインは俺にわかるように話してはくれないから。

「飯時にする話じゃなかったな。だが、安心しろ。もうすぐ終わるさ、何もかも平和にな」

もうこの話題はやめにしようと思った。

俺は当事者なのに、蚊帳の外。流されているしかないんだから。

終わりが不穏なものにしか思えなくても、それでも……

夢を見た。レインがいなくなる夢、いや、違う。レインが現れる前に戻る夢、レインがいなかったことになる、ただそれだけなのに怖くて仕方がなかった。

いつから、こんなに臆病になったのかは知らない。

でも、怖いと思うのはあの人を傷付けた時以来かもしれない。

俺はこれまでに恨まれても仕方がないことをしてきた。遊びに身を投じて、容易く人を傷付けてきた。遊びはもうやめた。

今はレイン以上に価値のあるものを知らないと言える。

レインは俺のせいで傷付いたりしない。だから、安心するのもかもしれない。

だから、その安定剤を失ってしまうのはとてつもなく、怖い。そうなるくらいなら、レインの手で殺された方がずっといい。

跳び起きて、顔を洗って、リビングに駆け込めば、レインが笑った。

「何だ、リオ。怖い夢でも見ておねしょでもしたか？」

いつもと同じだと思った。でも、違う。テーブルの上に置かれた朝食、レインは身支度が済んでる感じで足元には荷物、ソファアの上に折り畳まれた俺が買わされた服。

まるで、出て行こうとしているみたいだ。

「レイン」

何のつもりなのか。

聞きたいのに言葉が出てこない。

唇が震えて、本能的に聞いちゃいけないことをわかっているみたいに。

「もう戻れない。これで、サヨナラだ」

レインは気付いてしまったなら仕方がないと言ったのようだった。

「何だよ……それ。わけわかんねえよ！」

こいつはいつも突然だ。わけわかんねえことばかり。

考えてみれば短い期間だったのに、ずっと振り回されていた気が

する。

「だろうな」

「許さねえ、絶対に許さねえ……こんな終わり方があってたまるかよ！」

あつさりと言われて、俺は頭に血が上るのを感じた。
守ると言ったところは嘘だったのか。

レインがゆっくり近付いてくる。始まりのあの日みたいに俺は動けなくなる。

「許さなくていいさ。とくに私は許されない存在だ」

罪人のようにレインは言う。普通の女の子みたいなのに、暗殺者、犯罪者と一緒にいた俺はストックホルム・シンドロームになったとでも言われるのか。

背中がカーペットに押し付けられて、押し倒されたことに気付いた。

人形のような顔には見慣れたはずなのに、やっぱりドキツとする。そして、触れたか触れないかわからないような、そんなキス。

それだけで魂を抜かれた気分になって、気付いた時にはレインは部屋を出ていた。

起き上がれなくて、呼び止められなくて、サヨナラのキスは胸に痛かった。

それから暫く俺は泣いた。何も考えずに泣いた。誰も見てない、誰も聞いていない。苦しくて、悲しくて、悔しくて、自分が男だっ
てことも忘れるぐらい、子供みたいに泣いた。

けれど、レインは戻ってこない。俺を慰めてはくれない。レインの私物は何一つ残されてなくて、夢が現実になったと思った。
でも、違うのは、なかったことにはできないってこと。

最後の晚餐は駅前のタコ焼きと焼きそばとシュークリームとプリン。最初のピザの方がましだったと思う。

冷め切った朝食の味は涙に紛れてわからなかった。

レインは卑怯だ。確実に俺を殺した。俺の心を殺して、置き去り

にした。

サヨナラのキスが俺にトドメを刺した。

K i s s O f f

レインがいなくなつて三日、戻つて来る気配はない。

もう戻つてこないとわかつていた。俺の生活は夢みたいに元に戻るはずだった。

夕立が止んだ。それだけのことなのに、俺の心にはぼっかりと穴が開いている。

戻るものなんて何もない。

自棄になつても、昔みたいに適当な女と遊ぼうとは思わない。

でも、そんなに昔のことじゃない。本当に数日前、数週間のことなのに今は遠い。

また適当な女を引っかければレインが現れてくれるか。そんなことも考えたけど、もう終わったことだと思いたかった。長くて短い夢を見ていたつてだけのことだつて。

街をフラフラして、レインに会えるんじゃないかつて思ったけど、会えるはずもない。

だつて、レインは闇に生きる殺し屋だから光のある場所にはきつと現れない。

「リオ」

地面ばかり眺めてて、声をかけられて、慌てて顔を上げてちよつとがっかりした。

「よお、しけたツラだな」

まるであいつみたいないくぶりでそいつは言った。でも、違う。何もかも違う。

「……レオ？」

沈黙したのはありえないと思つたから。疑問形になつたのもやっぱりありえないと思つたから。

猛獣のようなレインのパートナー、レオ。金に染めた髪、長身で目立つ男、殺し屋のくせにまるで今時の若者って感じの格好でレオはその景色の中にいた。

すれ違う女がちらちらとレオを振り返る。目立っている。でも、違和感がない。

「何だよ、忘れたのかと思ったぜ」

レオが肩を竦める。そんな草さえ不自然さがなくて、格好いいと思う。同じ男なのに抱かれてもいいなんて思ってしまうような魔力を持っている。

「ちよつとびつくりしたただけだ」

「殺し屋に見えねえって？」

俺が言えばレオは笑った。

「俺の心を読むなよ」

「デメエが単純なんだよ、バーカ」

「うるせえ」

こんなやりとりが普通の男友達みたいだっと思った。でも違う。

「つーか、何でそんなにお洒落なんだよ？」

殺し屋のくせにレオは凄くおしゃれだ。服も靴もアクセサリーもセンスが良くて、ブランド物だってわかる。

髪の間から見えるピアスはレインとお揃い、そう思うとちよつと複雑な気分になる。

「偏見だ。俺だって人間なんだぜ？ 浮いててどうする？」

「溶け込み過ぎだ」

肩を震わせて笑うレオはあまりに普通だった。「プロだからな」とレオは笑うけど、質の悪い冗談じゃないかって思うくらいに普通だ。

レオに「ちよつと話そうぜ」って連れてこられたのは公園だった。男二人で公園つてのも妙な感じで、レオは俺をベンチに置き去りにして飲み物まで買って来た。

初々しい学生のデートかよ！

スポーツドリンクのペットボトルの蓋を開けて、レオはグイッと飲んだ。

まずいコーヒーでもなく、お茶でもなく、ジュースでもなく、ミネラルウォーターでもなく、スポーツドリンク。

俺には何にも聞かずに炭酸押し付けたくせに。

「レインはどうしてる？」

喉の渴きを潤した獣は問う。まさか、それを聞かれるとは思わなかった。

「そんなの俺が聞きたいぐらいだ」

「何だと？」

レオの顔は険しくなる。暗殺者だからっていうか、顔が綺麗だから余計に怖い。

「出てったよ。突然」

怖かろうと、嘔を吐く必要はない。レオさえ知らないのが事実なのだから。

レオは少し考えた後、またグイッと飲み物を飲んだ。

「……レインは teme の親父のヒットの依頼を受けていた」

重々しい感じでレオは言うけれど、そんなの今更だ。

「だから、俺に近付いたんだろ？」

俺だって馬鹿じゃない。「殺す」って言われて出会って、その時からわかってた。「何だ、知ってたのか」ってレオは言うけど、どうでも良さそうだった。

「親父を探って、脅しをかけてたんだろ？」

レインは曖昧にした答え、レオなら答えてくれると思っていた。どうせ、俺なんて早く死ねばいいと思ってるに決まってる。

「だが、拒否した」

レオの言葉が信じられなかった。拒否、それはどういう意味か。「何でだよ？」

聞いてから聞かなきゃ良かったと思った。レオの一瞥はかなり破

壊力がある。

「デメエに情が移ったんだろうよ。引退するとまで言い出したんだからな」

レオは淡々と言った。だから、俺はレオに勝ったとは思えなかった。だって、レインは俺からも離れていった。

俺が思わず「わけわかんねえ」って吐き出すと「本当にわけわかんねえよな」って、溜め息を吐いてみせた。

「だけど、安心した」

「え？」

「お前がいるってことは、まだ奴は現れる」

不穏な空気が流れて俺は身体が動かせなくなる。

レオは俺にとって味方じゃなかったことを思い知らされる。

「裏切り者には死を、だ。組織のトップだろうと、パートナーだろうと何だろうと例外はねえ」

レオは仮面のように冷たい表情で言った。その奥の瞳は暗い。荒んだ目をしてる。

「そんな！ 何で……」

「任務を放棄して逃亡中、庇う理由もねえ」

言葉が出てこない。レオがレインを殺す。本当に、この世からレインがいなくなる。現実的じゃない。

言葉が出なくなる。自分が殺されると思った時よりもずっと苦しい。

「俺たちに光はない。ずっと闇の中を這いずって、地獄に落ちる」

レオもレインもアンダーグラウンド生きている。普通じゃない裏の仕事、どんな気持ちでやっているのかなんて俺にはわからない。それを思い知らされた気がした。

「まだ、生かしておいてやる」

まだ、胸に突き刺さる言葉、レオが俺の命を握っているってこと。

「だが、王子様を攫ったらお姫様はくるかもしれねえな」

思いついたように、楽しげにレオが言う。

獲物をいたぶるかのように。

「レインがやらなきゃ、俺がやる。お前は俺のオルタナティブにはなれない」

レオが嘲笑した。それは誰に向けたものなのか。俺か、レインか、或いはその両方か。

だけど、その言葉の意味がわからない。

「何だよ、それ？」

「俺はずっとレインと一緒にいた。それをお前なんかには壊されるなら、自分で壊しちまった方がいい」

レオがその眼力だけで殺そうとしているみたいに俺を見た。

金縛り、逃げなきゃ殺されると思うのに、指さえ動かせない。

胸倉を掴まれて、やばいと思った。

「お前はRIO、LEOじゃない」

何を言っているのかわからなかった。俺は理央であってリオなのに。リオもリオも一緒じゃないか。

結局、吐き捨てて、レオはいなくなった。

そのまま、何も起きない日が続いた。

けれど、この日、起きるとリビングに知らない男がいた。レオとはまた違う感じの獣っぽい男。ワイルドでナンパっぽい。多分、レオよりもちょっと年上だと思う。

混乱する俺に気付いて、悠々とソファに座っていたその人は手を上げた。

「よお、猛獣に睨まれた気分はどうだ？」

勝手に俺の家に上がり込んでる時点で薄々気付いてたけど、この人も暗殺者だって確信した。

ついに来たって思った。スウェットのまま立ち尽くす俺にその男はニカツと笑った。

「俺は黒崎兵吾、略してクロヒョウ、故にコードネームは黒豹^{くろひょう}。ヒ

「ヨーゴさんって呼んじゃっていいぜ」

この人は人懐こい感じだけど、言ってることはあんまり平和じゃない。

普通の人はコードネームなんて持ってないと思う。これはユーモアじゃなくて、本当のこと。

「あ、あの……兵吾さん？」

軽々しく呼べる感じじゃないのに、呼ばないと怒られそうな気がした。

「最初にはつきりさせておくが、俺はレインとは違う組織に属してる。敵だ」

口を開いたものの、何を言うべきなのか迷った俺に兵吾さんは本当にはつきり言った。「この意味がわかるな？」と聞かれて、俺は黙って頷いた。

これはかなりやばい状況ってわけだ。

レインの敵がここにいてってことは、考えることはレオと大体一緒だと思う。

任務のために俺を殺すか、俺を人質にして親父を殺すか最終的に一家心中か、レインをおびき寄せる餌にされるか。まあ、レオはその全部を一遍にやりたいんだろう。つまり、皆殺しエンド的な。

でも、そんなことよりも俺はレインと兵吾さんの関係が気になった。レインは兵吾さんのことをどう思ってるのか、兵吾さんはレインをどう思ってたのか。

「ちなみに好敵手って書いてライバルと読んでもらえるとしつくりくる」

武器を見せるとか、脅すとかするわけでもなく、「俺のこだわりなんて話し出す兵吾さんは体裁を気にする人だっと思った。

それでも、よく関係が理解できない俺に兵吾さんは「つまり俺たちはグッドな仲なんだよ」と笑った。

「まあ、座れよ。俺は殺しのデリバリーに来たわけじゃねえし」
いや、ここ、俺の部屋ですけど。

一瞬思っただけ、従うしかない。大体、デリバリーも頼んでないし。

「まあ、一杯やって楽しく話そうぜ」

渋々俺が座ると、兵吾さんは缶ビールをテーブルの上に置いた。朝っぱらからこの人は何を考えてるんだ。

「兵吾さんはレインが戻って来ると思ってるんですか？」

「しけた顔はよくないぜ、酒は楽しく飲んだ方がいい」

聞いてみたら、兵吾さんは缶を掲げて豪快に笑った。まさか、もう、酔っぱらってるのか？

「まあ、レインが出て行った原因は俺だ」

「え？」

兵吾さんはよくわからない。急に真剣な表情で言った。

「俺は殺しのデリバリーはしねえけど、真相のデリバリーはするんだよ。まあ、それが親切じゃねえことはわかってるから、絶望のデリバリーかもしれねえけどな」

そう言って、兵吾さんはサディスティックな笑みを見せた。

こっちはこんなにもぞつとするのに、それを楽しんでる。

「レインはお前の親父さんを殺す依頼を受けた。でも、俺のところも同じ依頼を受けた。この前、お家にお邪魔したのはこっちの先走りやがった下っ端の人たち」

恐ろしく淡々と兵吾さんは言った。家族は無事だけど、家は荒れた。兵吾さんは「俺は関与してねえけど」って言うけど、怖い人だっというのは間違いない。

「依頼が被ることはあっても、どうにもレインの行動は解せねえ。こっちも様子を見ていたら、何と驚愕の事実が明らかになっちまったわけだ」

まるで映画の話みたいに兵吾さんは話す。何か自分に関わることなのに全然現実味が感じられない。

「おいおい、何か相槌打ってくれよ。俺一人で喋ってるって何か酔

っ払いみたいじゃねえかよ」

俺が黙っていると、兵吾さんはテーブルに缶を置いて言った。
酔っ払いに絡まれてる気分ですけど。

「まあ、俺は真相知って滅茶苦茶ガツカリしたぜ。レインもそうだっただろうよ。ある意味、神聖な仕事が親子喧嘩に利用されるなんてあつちやいけねえ」

結局、それほど気にしてる風でもなく、ビニール袋からビーフジャーキーを取り出して、袋を空けた。

「お前、親父さん好きか？」

兵吾さんをガツカリさせる親子喧嘩って何だろう。

そうぼんやりと考えた俺にビーフジャーキーを加えた兵吾さんが問う。

「好きとははつきり言えないです」

嫌いじゃないけど、好きだとは言えない。そんな微妙な関係。

「じゃあ、兄貴は？ 巽央理」

聞かれて、俺はドキツとした。心臓が止まるんじゃないかってくらい、その名前は心臓に悪い。

「……俺にはあの人を嫌いになる権利なんてないですから」

好きとか嫌いとかそういう問題じゃない。俺には許されない。

「でも、兄貴はお前のこと、大嫌いだろ？」

兵吾さんは遠慮なしに聞いてくる。

けど、それは事実。兄貴は俺を憎んでる。兄貴にとって俺は生まれない方が良かった存在。親父の“央”と母さんの理子の“理”を取った愛の結晶、それが兄貴。それで良かったのに、俺は生まれてしまった。そう言うとも母さんに悪いと思うけど。

兄貴が物心ついた頃、俺は生まれた。親の愛を独り占めにしたいと思ってた時、生まれた俺は病弱で、俺の側にはいつも母さんがいた。俺から母さんを取り返そうとして、テストでいい点数をとったり、何かで賞を貰ったり……俺以上に褒められたくて必死だったと思う。でも、親父にとってそれは当然のことだった。

兄貴が親父の敷いたレールの上を走って、俺は母さんに散々甘やかされて好き勝手に生きて、それでも、兄貴が一緒の時には影になるかと必死だった。

「男のジェラシーって手に負えねえよな。醜いっていうか、面倒臭えっていうか」

兵吾さんは一人で笑いながら言った。これって、酔っ払いじゃないのか？

でも、今の俺には余裕がない。兄貴の名前を出された以上、落ち着いてなんかいられない。

「はつきり言ってくれませんか？」

「えー、これから感動の物語なのに？」

兵吾さんは不満そうだったけど、先を待つことなんてできない。

「じゃあ、言ってやるよ。うちに巽央の殺しを依頼したのは巽央理だ」

信じられない。

親父は兄貴に今の道を強要した。でも、そこまで憎んでると思っただけじゃなかった。

「驚くのはまだ待てよ。何せ、レインに依頼したのは巽央ご本人様なんだからよ」

兵吾さんは本当に淡々と言った。でも、嘘じゃないって思った。

レインは知ってたのか。知ってて俺の前に現れたのか。

「自分の息子が闇に手を染めるくらいなら、自分で終わらせたかったのか、希望を持ってたのかは知らねえけどよ」

親父のことがわからない。

兄貴のこともわからない。

いつそ俺を殺してくれればいい。でも、俺を殺したって何にもならないんだろっ。

「まあ、とにかく、何もなかったことになりそうだな。レインが手を引いたからって、その獲物を悠々と狩るのも癪だからな。兄貴の方はボスが上手くやってくれるよ。俺が我慢してババアと寝ればだ

けど」

兵吾さんは俺を安心させたいのか、不安にさせたいのかよくわからない。

でも、一つだけわかったことがある。この問題は兵吾さんたちにもレインたちにも本当の意味では解決できないってこと。

「だが、気を付けろよ、百獣の王はお前を許してくれねえぜ。何せ、レインはもう組織に戻るつもりはないみてえだからな」

“百獣の王”——遠回しなその言葉が誰を意味するのかはすぐにわかった。人食いライオンのようだった子供レオ、彼は本気でレインを殺すと思う。全てを裏切りだと思つて。

「兵吾さんは……」

何となく怖いと思いながらも俺は本音を聞こうとして、聞けなかった。でも、兵吾さんはわかったみたいだった。

「俺？ 俺は、懐が深い男だからな」

兵吾さんはカラカラと笑う。でも、すぐに怒りそう。この人、絶対、短気だ。

でも、怒られても、俺には聞きたいことがあった。多分、今じゃなきゃ聞けない。

「レインのことが好きなんですか？」

「はっ、違えし、ありえねえし、ロリコンじゃねえし」

「いや、ロリってほどじゃ……」

「貧乳とか興味ねえし、今後の成長に期待してねえし、年上好きだし、あんなガキじゃあな……俺を満足させられるのは戦いにおいてだけだ」

兵吾さんは物凄く早口に答えた。まあ、嫌いじゃないんだと思うけど、そういう好きじゃないらしい。暗殺者にとって愛と殺し、どっちが重要なのか俺にはわからないけど。

「でも、暫くは後輩いじめて楽しむさ。あいつの劣化版みたいのがちょー生意気だし、その連れが役に立たねえし、そろそろ手え出しでも良さげだしな」

くつくつと笑って、“新しい遊び”を考える兵吾さんは本当に楽しそうで、真性のサドだと思った。どんな理由であっても、絶対にこの人に狙われたくはない

「まあ、もうちょっとでファイナーだ。頑張れよ。俺も頑張るから——じゃあな」

飲み終わった缶をぐしゃっと潰して、立ち上がった兵吾さんが言う。

どんな終わり方が待ってるかは俺にはわからない。

でも、去って行くその背を引き留めて、機嫌を損ねると頑張ってくれなくなる。今は俺の味方だと思うけど、きっとその感情は簡単に変わってしまうと思うから。

兵吾さんが来てから数日、俺はやっぱり失意のまま街を彷徨った。色のない街、生気のない雑踏、耳を抜けていく雑音、何もかも褪せていて意味がない。

気が付いたら好きなアーティストの新譜が出ていて、そこら中で話題になっているのに欲しいとは思わなかった。上辺だけの仲間との話題作りも虚しい暇潰しも必要だとは思えない。必要なのはただ一人、俺の心を殺した暗殺者——レイン。彼女が側にいてくれるだけ、それだけでいいのに。

そうやって、レインのことばかりを考えてたから、俺はついに幻覚を見たのかもしれない。

その姿は鮮やかに見えた。艶やかな黒髪、カーキのジャケットを纏って、どこかを目指して歩いてた。

通りの反対側、慌てて俺はその後を追った。何て言ってやろうとか、そんなことはどうでも良くて、ただ見失わないように必死に追いかけた。

空を切り刻むかのようにそびえ立つビル、レインはどこを目指しているのか。息が切れてきた頃、大分、距離が近付いて、階段が見

えた。

階段に差しかった時、レインは既に上りきろうとしていて、俺は慌てて呼びかけた。

「レイン！」

人氣がなくて、俺の声は確実に届いたと思う。俺はずっと追いかけて来たその背がレインのものだと信じていた。

彼女はゆっくりと振り返る。レイン、確かに彼女だった。

「」

レインの唇が動く。けど、何て言ったのかわからなかった。急いで近付こうとして、でも、レインも待っていてはくれなかった。階段を駆け上がって、レインは広場の中央にいた。

「レイン！」

もう一度、呼びかけた声はかき消えた。

銃声、レインの体が崩れ落ちて、赤が広がる。でも、駆け寄ろうとしてできなかった。ぐいっと肩を捕まれ、建物の影にまで引きずり込まれる。

「今、出たら死ぬぞ」

そう言ったのは兵吾さんだった。手には、銃が握られている。人が少ないとは言っても、銃刀法違反に変わりはないし、壁の向こうで悲鳴が聞こえる。非現実的。

「屋上から奴がライフルで狙ってんだよ。撃たれたら洒落になんねえ。とにかく、離れるぞ」

奴、それが誰かはすぐにわかった。レオが本当にレインを殺そうと……

「あそこな、レインの組織の本社があるところなんだよ。ボスに呼び出されて、あいつは応じた。罠だってことをわかっていてな」

歩きながら、兵吾さんは説明してくれた。

でも、それだけだった。人氣のない路地で急にぴたりと足を止めてじっと俺を見た。

「もうすぐ、決着がつく。だから、暫く寝ててくれ」
衝撃を感じた時にはもう地面が近くに見える。そこで俺の意識は途切れた。

あの後、俺は自分の部屋のベッドの上で目を覚ました。誰もいない。何の痕跡もない。でも、夢を見ていたわけじゃないことはわかった。

あの銃撃は無差別の射殺事件としてニュースになっていた。メディアに取り上げられる写真はレインだったけど、全く別の名前で報道された。

暫く騒がれて、すぐに人々は忘れた。事件は絶えず、毎日どこかで何件も起きてる。

兵吾さんはあの時何も教えてくれなかったし、あれから会ってもいない。

でも、俺は今でもまた夕立が突然来るような気がしている。

『退屈なんだろう？ リオ・タツミ』

そう言って彼女が現れるように思えて仕方がない。彼女が死んだなんて信じられないから。

いや、彼女は絶対に生きている。あの時は気が動転していたけど、今なら冷静に考えられる。不自然なことが多すぎる。あの時兵吾さんからは火薬の匂いがした。それに、レインはライフルに撃たれたって感じじゃなかった。俺はレインが本当に死んだかを確認していない。近付かせてもらえなかった。

多分、そうやって死んだことにしてレインは暗殺業から引退したんだと思う。

俺が生きていれば、レインはいつかは迎えに来てくれるかもしれない。或いは、迎えに行けるかもしれない。

そう、俺が自分の力で生きられるようになれば、きっと……

全てはほんの一月の出来事だったけど、それは何よりも非現実的

で現実だった。

俺はこれからも現実を生きていかなければならない。彼女が俺を置き去りにしたことを後悔するくらいに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7249y/>

アンリアル

2011年11月25日18時48分発行